

2024年5月24日

取りまとめ機関：国立研究開発法人 水産研究・教育機構

## 4月までの日本海におけるスルメイカの調査結果と漁況

### 【本報告書の概要】

- (1) 2024年4月に実施したスルメイカ漁期前分布調査では、スルメイカの分布密度を示すCPUE（いか釣り機1台1時間あたりの漁獲尾数）の平均値は0.05尾で、前年（0.63尾）および過去5年（2019年～2023年）平均（2.28尾）を下回った。
- (2) 2023年10月～11月に実施したスルメイカ稚仔調査では、幼生の平均採集尾数は0.07尾で2022年並みであり、過去5年（2018年～2022年）平均（0.29尾）を下回った。
- (3) 2024年1月～3月の小型いか釣り漁業等によるスルメイカ（生鮮）の漁獲量は、日本海沿岸域全体で、前年および過去5年（2019年～2023年）平均を下回った。

# 1 2024年4月のスルメイカ漁期前分布調査結果

日本海沿岸でのいか釣り漁業における漁期始めの漁獲の主体となるスルメイカを対象とし、2024年4月に日本海中部海域においていか釣り調査\*1)を20定点で実施した(図1)。

2024年は、各調査点の分布密度の指標となるCPUE(釣り機1台1時間あたりの漁獲尾数)は最大でも0.64尾であり、前年とは異なりCPUEが1尾を超える点はなかった。また、2024年は漁獲の無い調査点の割合が50%を占め、前年(12.5%)を上回った。調査で採集された魚体は、外套背長16cm以下の、前年秋生まれと考えられる個体が主体であった。主に南下群と考えられる外套背長20cm以上の個体は、前年には沖合域を除く調査海域のほぼ全域で漁獲されたが、2024年の調査では鳥取県沖の1点でのみ漁獲された。また、図2に示す全調査点のCPUEの平均値は0.05尾で、前年(0.63尾)および過去5年(2019年~2023年)平均(2.28尾)を下回り、2019年に調査を開始して以降最低の値であった。本調査から得られた4月の日本海中部海域におけるスルメイカの分布密度は極めて低かった。

\*1) スルメイカ漁期前分布調査：自動イカ釣り機による釣獲試験。各調査点で夜間に8時間~10時間の釣獲を実施。

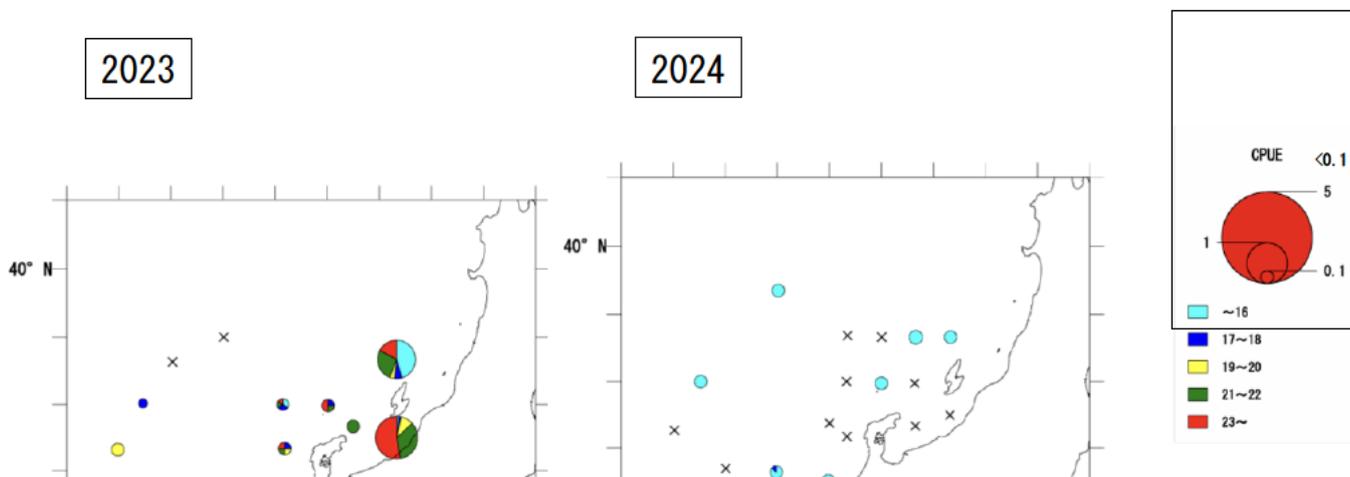


図1 2023年4月および2024年4月のいか釣り調査結果

●の面積はCPUE(釣り機1台1時間あたりの漁獲尾数)、各色は各外套背長範囲(cm台)の比率、×は採集されなかった調査点をそれぞれ示す(CPUEが0.1未満の調査点については●の大きさを最小とした)。

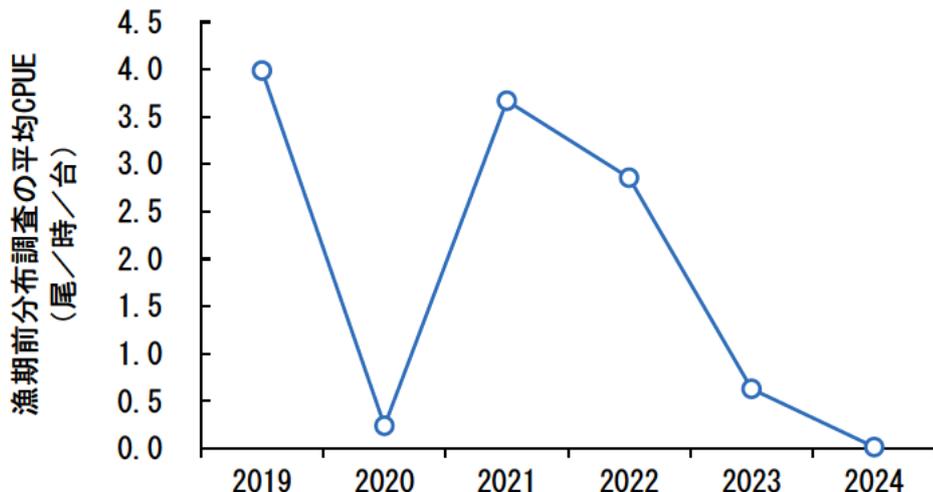


図2 スルメイカ漁期前分布調査における全調査点の平均CPUE(いか釣り機1台1時間当たりの漁獲尾数)の年推移。

## 2 2023年秋のスルメイカ幼生の分布状況

5月～10月の日本海では、主に前年の秋～冬に生まれたスルメイカ秋季発生系群が漁獲される。したがって、秋～冬のスルメイカ幼生の分布量は、その年のスルメイカ秋季発生系群の親魚量の指標となると期待される。このため、山陰～東シナ海にかけて毎年10月～11月および12月にスルメイカ稚仔調査\*2)を実施し、親魚量豊度の情報を収集している。

2023年10月～11月の調査では84定点で調査を実施したが、スルメイカ幼生の全調査点における採集数は6尾に留まり、隠岐島周辺と山口県沖合および五島列島周辺海域でのみ採集された(図3左)。1調査点あたりの平均採集尾数は0.07尾と、2022年(0.07尾)と同様に低い水準で、過去5年(2018年～2022年)平均(0.29尾)の24%に留まった(図4)。12月の調査においては73定点で調査を実施したが、スルメイカ幼生は五島列島沖で1尾採集されたのみであった(図3右)。上記の結果から、本年の漁獲対象となる群れの親魚量は2022年と同様に少なかったことが示唆される。

\*2) スルメイカ稚仔調査：口径45cmのプランクトンネット(網目合0.33mm)を用いた採集調査。各調査点で深度150mから海面までの鉛直曳によって主に外套背長1mm～3mmのスルメイカ幼生を採集する。

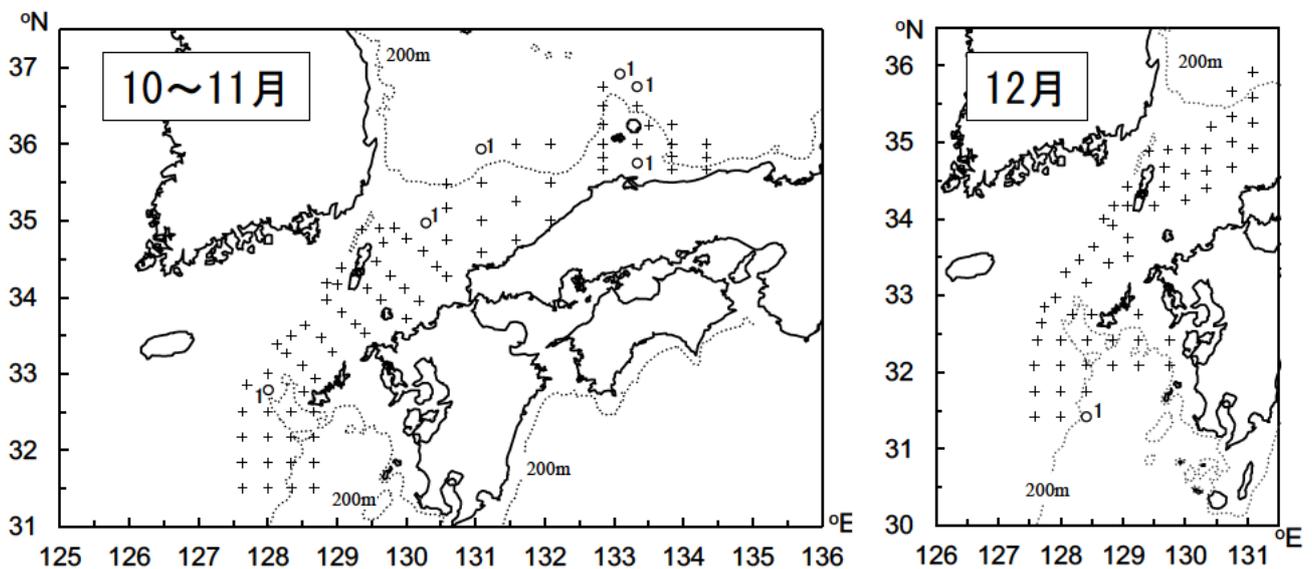


図3 2023年10月～11月(左)と12月(右)におけるスルメイカ稚仔調査結果

○は幼生が採集された調査点、+は幼生が採集されなかった調査点。図中の数字は各調査点における採集尾数。

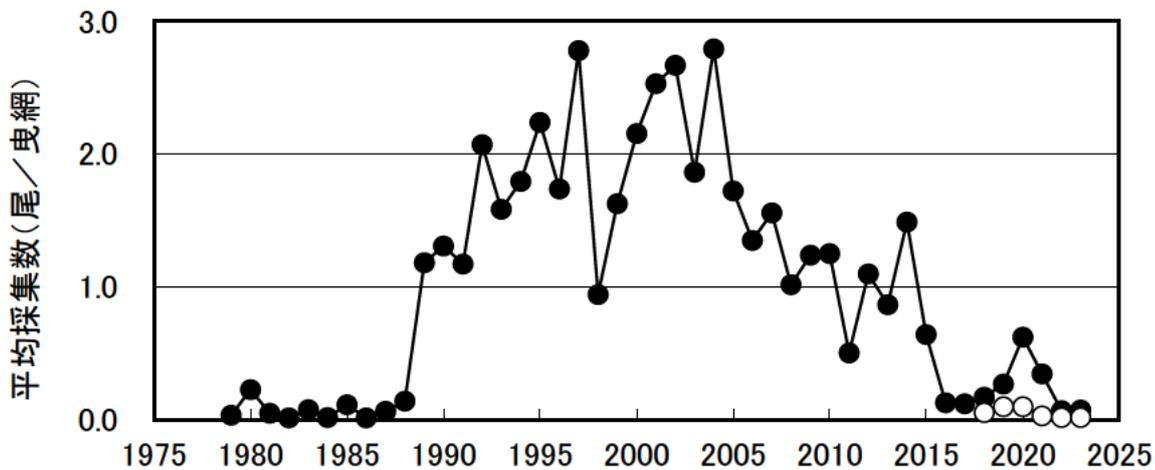


図4 スルメイカ幼生の1調査点あたりの平均採集尾数の経年変化。●は10月～11月、○は12月の平均採集尾数をそれぞれ示す。

### 3 日本海沿岸域におけるスルメイカ漁況の経過

日本海では、1月～3月上旬は前年の冬（主に1月～3月）に生まれたスルメイカ（冬季発生系群）が漁獲される。3月中旬～4月は前年の春～夏に生まれたスルメイカ、5月以降は前年の秋（10月～12月）に生まれたスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲の中心となり、時期により漁獲対象となる系群が異なる。

前年の漁期前半（2023年5月～7月）では、小型いか釣り漁業を主体とした生鮮スルメイカの漁獲量は日本海沿岸全域で過去5年（2018年～2022年）平均の20%と下回った（図5、6）。海域別に見ても、道北・道央、道南・津軽がそれぞれ過去5年（2018年～2022年）平均の4%と28%、本州北部日本海と西部日本海は過去5年平均の17%と36%と、全ての海域で過去5年平均を大きく下回る水準となった。漁期後半（8月～12月）は、道北・道央、道南・津軽および本州北部日本海がそれぞれ過去5年（2018年～2022年）平均の10%、21%および49%と下回った一方で、西部日本海では、過去5年平均の196%と大きく上回った。

2024年1月～3月の漁獲量は日本海沿岸全域で、前年の52%、過去5年（2019年～2023年）平均の40%と下回った。海域別に見ると、本州北部日本海は前年の81%、過去5年（2019年～2023年）平均の52%となり、前年並みで過去5年平均を下回った。また、西部日本海では1月～3月は前年および過去5年（2019年～2023年）平均の10%と、前年および過去5年平均を大きく下回った。

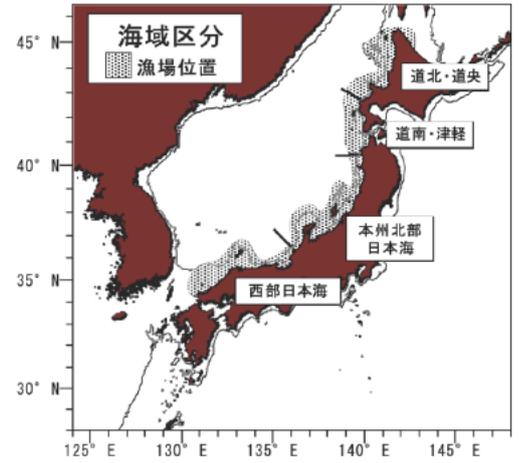
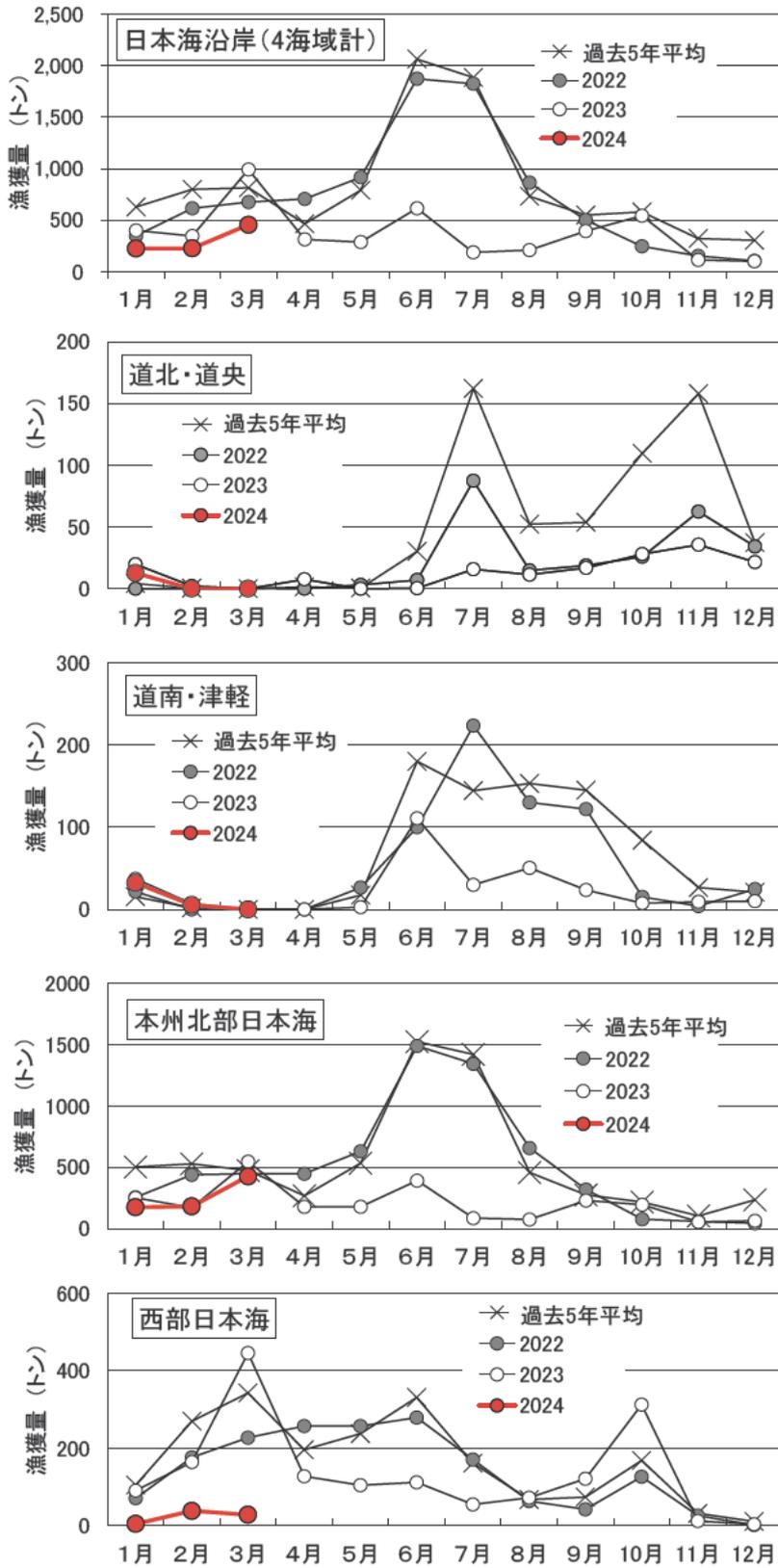


図6 本資料における漁獲量の海域区分  
道北・道央は宗谷～後志、道南・津軽は渡島、檜山、青森県、本州北部日本海は秋田県～石川県、西部日本海は福井県～長崎県をそれぞれ示す。

図5 日本海沿岸 (4海域計) および海域ごとの漁獲量 (過去5年 (2019年～2023年) 平均、2022年、2023年および2024年) の経過。ただし2024年の一部は速報値。

## 参考情報 2024年度第1回日本海海況予報

2024年度第1回日本海海況予報<sup>\*3)</sup>では、4月中旬～6月の対馬暖流域の表面水温および50m深水温はともに平年値（日本海海況予報における平年値は1986年～2015年の平均値）よりも「やや高め」と予測された。

\*3) [https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2024/files/20240405\\_jpnsea-1st.pdf](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2024/files/20240405_jpnsea-1st.pdf)

## 参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場 稚内水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産研究所	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター  (取りまとめ機関)
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所